二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 高岡智空
挿絵 ジェット世渡り

序　章　戦姫ルクレツィア、戦場に舞う　006
第一章　決死の潜入任務、恥辱の戦い　021
第二章　閉ざされた研究室、捕らわれの戦姫　058
第三章　戦姫の自白、羞恥の拘束性交　098
第四章　精飲調教、戦姫の淫貌　132
第五章　戦姫ルクレツィア、淫獄に堕つ　191
終　章　奴隷将校ルクレツィア　240

登場人物紹介

Characters

ルクレツィア＝ベル

惑星国家リヒテル公国軍司令部少佐。凛々しく麗しい容姿に加え、戦場では数々の戦果を上げることで『黒髪の戦姫』と称えられる才媛。敵地潜入時には『ベル＝アナスタシア』と名乗る。

バロウズ

惑星国家ノルドス帝国軍が保有する旗艦の艦長。大柄で軍人然とした中年の男。

言葉さえ耳に入っていたのかどうか……。
モニターでは美人将校がその白い肌を汚され、黒髪を染められ、全身をドロドロに濡らされているのだ。いけないとはわかりつつもその欲望に逆らえず、いつしか兵たちは食い入るようにその痴態を見つめ続けていた。

◇

それから、一日あまりが経過し――。
白濁を浴び続けたルクレツィアは昨日以上の汚れと牡の臭気に包まれ、どこか呆けた瞳で虚空を見つめていた。頬は紅潮し、口はぽっかりと丸く開いて、桃色の舌を口内の暗闇からうっすらと覗かせている。が――酷い有様ながら、ルクレツィアはその瞳の奥では強い意志を燃やし、眩い輝きを奥底に秘めていた。
（あ……と、二日――ぅ、くぅ……）
まもなく終わろうとする五日目、それを頭の片隅で考えつつも、どうしても思考を邪魔する濃厚な生臭さ、青臭さに眉をひそめる。たとえ息を止めても、身体にまとわりつくネットリとした感触が自分を襲う精臭を思いださせる。次に思い浮かぶのはその味、そして味わわされ続けた肉欲の感覚だ。それらは脳内に桃色の霧を充満させ、引き締めようとする瞳もトロンと濁らせ、蕩けさせてしまう。
（はぁ……んくぅぅ……せ、せめて……これを流せれば……）
乾かず服の生地に張りついた精液を見ると、日々を追うごとにシャワーが恋しくなる。

これほどにまで汚された状態で部下たちと通信するのは、たとえモニターが白黒でハッキリと見られないとはいえ、惨めな姿を見つめられているようで耐えがたかった。顔に付着する白濁だけでも落とそうと、最初の三日は頭を振るってなんとか見られる顔を保っていたのだが――いまではそんなことをしても無意味なほどに、全身は汚されてしまっている。精液を浴びせる男たちが、毎日のように増え続けているせいだ。

チラリと、さきほどまで部下と話をしていた右手の壁にあるモニターを見やる。部下たちは自分を気遣うような視線をくれるというのに、自分はこの現状を気づかれまいかと心配するばかりで、ろくな会話もできなかった。そんな自分の情けなさにも、嫌気がさす。たとえ彼らが洗脳されていないとしても、自分がこんなことではやがて命を奪われてしまうかもしれないのだ――。

「くっ……しっかりしないか、ルクレツィア……っ！」

懸命に己を鼓舞しようと、心に叱咤の声を投げかける。だが、強く拳を握り締めた瞬間、手の中にたまっていた精液の塊を潰してしまい、ニチャァ……というおぞましい粘着音、そして感覚が手から腕へ這い下りて身体中を総毛立たせた。しかもそれは嫌悪感ではない、甘く包み込むような快楽の波を感じたせいである。

たちまち唇から舌が伸び、滴り落ちる精液の受け皿となって口周りをピチャピチャと舐め取ってしまう。したくてしているのではない、もはや条件反射のようなものだった。焦れったすぎる微弱な快感、それとともに広がる精液の味と臭い、そして舌触り。身体がそ

れをリアルに感じようとし、身近にあるその汚らわしい体液を啜り上げてしまう。
（んぅ、んあぁぁ……ほ、んとう、に……このまま、ではぁ……はぁ、んぶぅ……）
温かいお湯を――たとえ冷水でももはやかまわない。なんとかこのいやらしい臭いと感覚を取り除いて欲しかった。そう願い、ほぼあり得ないくらい絶望的な希望を込めて、鉄格子を見続けていると――。
「ん……ぁ……」
ブーツが床を叩く音……それも多人数の者がこちらに近づいてくるのが聞こえた。最後の通信が終わった以上、これ以上の陵辱を受けることはないはず。あとは眠るだけのはずなのだが――。
（いったい……なんだというのだ……？）
やがて廊下の陰から姿を見せたのは、数人の女性兵だった。見れば中には、ルクレツィアとともに慰安任務をこなしていた兵たちもいる。彼女らはそれぞれが手に洗面器を持ち、そこからはホカホカと温かそうな湯気を立ち昇らせていた。
一人が床に洗面器を置き、鉄格子の鍵を開けて中に入る。それに倣い、ほかの者も同じように洗面器を置いて牢内へと入ってきた。女性は全員で八名、男性ほどではないがやはりそれだけの数が入ると牢内も窮屈に感じられる。彼女らはグルリとルクレツィアを取り囲むように立ち並び、やがて正面に立った一人が口を開いた。
「お久しぶりですね、ベルさん……いえ、ルクレツィア少佐でしたか」

慰安任務のとき言葉を交わした女性兵が、以前と変わらない艶美な笑みを浮かべつつ、そう話しかける。ほのかに上気した頬に潤んだ瞳、まるで精臭漂うルクレツィアの姿に発情しているかのような悩ましさである。

「な……なんの、用だ……」

周りの女性たちも、同じような笑みを浮かべてじっとルクレツィアを見つめている。なんとも言えない不気味さを感じ、気圧されたように震えた声で問い返すと、女性はクスクスと忍び笑いをこぼした。

「そんなに怯えないでください、ね？　わたくしたちは、ちょっとした命令を受けてここに来ただけですから……ふふ」

「命令……だと？」

そんな言葉を聞いて、怯えないでというほうに無理がある。この艦で自分に関わる命令をだすなど、バロウズをおいてほかにない。今度はなにをされるのか、そんな想像に警戒心が強まる。が――女の口から飛びだしたのは、あまりに意外な言葉だった。

「えぇ。ルクレツィア少佐が望むようであれば、温かい水でお身体をお流しするように……と仰せつかってまいりました。いかがです？」

「なに……？」

ピクンと眉が動くが、心中では半信半疑だった。けれど洗面器の中身がお湯だとするならば、この言葉はあながち嘘ではないのかもしれない。だが、もしもお湯でなければ……

それに、全身を拭えるかどうかもまだ聞いてはいないのだ。期待をあまり表にださないように、ルクレツィアは冷静な口調で問いかける。
「……お前たちが持ってきたあの洗面器は、湯か？」
「えぇ。洗うために持ってきました」
それを聞き、少し安堵する……もっとも、彼女らが嘘を言っていなければだが。
「それでは……その、身体を流すというのは……全身を拭ってもらえるのか？」
微かな期待を込め、ルクレツィアは問いかける。だが女性兵は申し訳なさそうに首を振り、少し落ち込んだ声で答えた。
「申し訳ありません。いま少佐のお身体に触れては……言ってはなんですけれど、絶頂してしまうかもしれませんでしょう？　ですから、頭からかけて軽く流すだけになります。お望みでしたら口の中も濯がせていただきますけれどね……」
「――っっ！」
自分の浅ましい欲求を見透かされたようで、燃えるように頬が熱くなる。恥ずかしいことだがルクレツィアは密かに、身体を綺麗にされるという免罪符をもって彼女らの手で絶頂を迎えたがっていた。それはこらえがたい苦悶から逃れようという気持ちと、一度達してしまえば肉体が落ち着くはずだと考えたからなのだが――それでもイキたがっているように思わせた恥ずかしさが、全身を包んでしまう。
「そ、そんなことは……」

しどろもどろに言い訳をするが、女たちはすべてわかっているというようにクスクスと微笑んでおり、温かい眼差しの中にはどこか侮蔑が感じられた。自分の言葉などまともに聞く気はないのだろう……否定することを諦め、重苦しくため息を吐きだす。割りきってしまえば、相手の態度もそれほど気にはならなかった。この汚れを多少なりとも流せるならば、もうなんでもかまわない。

「わかった……頼む。口の中もだ、できるだけこの汚れを落としておきたいからな」

「まぁ、そんなこと仰って……汚れているのが、心地よいのではありませんか？」

「な……っ！」

揶揄する言葉に思わず感情的になり、怒鳴りつけそうになる。――が、それをすんでのところでこらえた。ここで怒りを見せれば、図星を突かれたのだと誤解を生むだけだ。

（そうだ……私は、こんなことで、感じたりなどしていない……っ）

長い呼吸で心を静め、ルクレツィアは再び視線を前に向ける。だが――そこにあったのは想像していたものとは正反対な、限りなくかけ離れたものだった。

「な……なにをしているっ、お前たちっ⁉」

洗面器を取りに向かうとばかり思っていた女たちは、なにを血迷ったか軍服のスカートをめくり上げ、己の秘部を晒しているのだ。しかも驚いたことに、彼女たちは誰一人として下着を身に着けていない。秘部に直接手を宛がい、陰唇を軽く開かせ、ルクレツィアのほうに全員が円を狭めてにじり寄ってくる。

「よ、よせ……なにをする気だ……っ」
「うふふ、もうおわかりになっているのでしょう？　これからわたくしたちの温かい水――いえ、小水で少佐の全身を流して差し上げるのです。もちろん、お口の中も……」
一瞬にして蒼白に染まった顔が震え、口が金魚のようにパクパクと開閉する。この女たちがなにを言っているのか、一瞬理解することができなかった。
（ば、馬鹿な……狂っている！　正気ではないぞ……）
逃れようというように身体を揺さぶるが、鎖や電子錠がカチャカチャと鳴るばかりで、一歩たりとも動くことはできない。たまらずルクレツィアは悲壮な声で叫ぶ。
「や、やめろ……もういい、流す必要は、ないから――」
「ほぉら、おとなしくなさってくださいね、しょ・う・さ・ど・の？」
制止の声も虚しく、女たちの股間はほぼ真上まで来てしまった。見ると彼女らの股間はしっとりと濡れそぼっており、艶かしい淫粘膜がグチュリ……とうねっている。
「くす……少佐の身体があまりにもいやらしい匂いを発していらっしゃるから、わたくしたちも感じてしまいました……ん、あん……」
言いながら、彼女は指を軽く膣口に埋没させる。眼前に押しつけられるように近づいた陰唇では、膣口の僅か上、小さな尿口がヒクヒクと蠢動を始めていた。
（や、やめろ……頼むっ）
――その願いも届かず、彼女らは次々に高い声を響かせる。

「あんっ、でます……」
「わ、わたしも……んぅぅ……」
――チョロッ……ジョロロ……ジョボボボボ……。
「ひぃっ……ぅ、あぁ……」
周囲ではじけた黄金水が、四方八方から激しく迸り、ルクレツィアを頭からずぶ濡れにしてゆく。微かに冷えた身体に心地よいくらいの温かさ、だがだからこそ、ルクレツィアは全身が硬直するほどのおぞましさを感じてしまう。
「い……いやぁぁっ！　やめろっ、やめろぉぉぉっ……んぶっ、うぉっ、げほぉっ！」
大きく開いた口にも小水が飛び込んできた。口の中にこびりついた精垢をこそぎながら、新たな汚れが口内を満たし、喉奥へ流れ込んでくる。髪も顔も、白濁は流されるのだが濃厚なアンモニア臭が周囲に立ち込め、鼻腔から脳へと染み渡ってゆく。全身を他人の尿で犯される異常な状況、嫌悪感……だというのに。
「んぐっ、んぉ、おぉぉ……」
口を小水に犯され、全身を黄金色の水流で染められながらルクレツィアは身体をビクビクと震わせ、尻をいやらしく躍らせてしまう。
（う、嘘だ……ひぃんっ、ふやっ……あぁ、き、気持ち……いぃ……なんて……っ）
敏感な肌を勢いよく打ち据える熱い迸りは、精液以上の甘刺激を送り込んでルクレツィアの心を蕩かしてゆく。ずいぶんと我慢していたのだろう、途切れることのない汚水流は

頭や顔、そして首筋を温かさで包んで愛撫の手を伸ばしてくる。顔中をずぶ濡れにし、それは白濁を取り込んで流れ流れ、肩口から胸元、そして二の腕や脇腹、ゆっくりと下腹部や太ももを拭って滴り落ちていった。白濁にまみれていたジャケットも、黄色がかった小水のせいでほんのり色づき、絞らずとも雫がこぼれるくらいに濡らされている。

「んぼっ、おほ……んおぉぉ……んぐっ、んぅぅ……」

上向かせていた顔を伏せ、口の中にたまった塩辛い小水を唾とともに吐き捨てる。その後頭部に幾筋も降りかかっていた汚水の滝は軌道を変え、そのまま頭を汚し続ける者もいれば、胸や太ももに直接尿をかけてくる者もいた。そのすべての部分が官能を呼び、ルクレツィアは狂おしいほどの快感に包まれてしまう。けれど――気を抜けばイッてしまいそうなほどの刺激から、今度は絶頂を迎えないようにこらえなければならなかった。

（ひぐっ、ぅ、うぅ……イ、イッてたまるか……こんな、最低の扱いで……んっ、んひぃっ！　ひあぁ……ふぅんっ！）

同性から尿をかけられて絶頂を迎えた女――そんな烙印を押されては、ルクレツィアは永遠に生き恥を晒していかねばならない。女として……人間としてのプライドが必死でその一線を越えさせまいと、快楽に耐え続ける。

「ひぐっ……んっ、んんんぅぅ……」

見上げることのできない頭上から、女たちの嘲笑が響く。

「クスクス……少佐ったら、わたくしたちのお小水で感じていらっしゃるみたい」

「やだぁ！　オシッコで感じるなんて、変態じゃないですかぁ！」
「仕方ないわよ、この女……汚されて感じるマゾらしいんだから」
小水の流れが弱まってくると、女たちはわざと息んで、ジャッ、ジャッと勢いのある水流を小刻みに飛ばし、ルクレツィアを責める。屈辱の言葉とともに降りかかる最低の愛撫――ルクレツィアは菌を食い縛って受け続けるしかなかった。
（うぐっ、ぐぅぅ……違う、私は……変態では……マゾなどではっ……くぅんっ！）
そのとき――一筋の黄金水がジャケットを突き上げていた乳首を掠め、太ももへ着弾した。衣服越しながら強烈な快感が胸先を包み、ジワァ……と身体の奥へ浸透していってしまう。ついぞ触れられることのなかった最高の性感帯を擦り上げられ、折れ曲がった身体が性衝撃にビクンッと跳ね上がった。
「ひやぁっ……あばっ、んぶぅっ……ぅ、んんんぅぅぅっっ！」
同時に自然と上向いた顔を目掛け、その鼻先へ、口内へ、最後の一搾りがチョロチョロと注がれてくる。顔の中心を汚される屈辱、そして口奉仕で散々に捏ねほぐされた喉粘膜を小水に擦られた快感が、とうとう絶頂の堰に綻びを入れる。
「あ……はぁぁっ……っっ、んくっ、うぅぅ……ぅぅっ！」
バチバチッと脳内に火花が散り、全身を強烈な圧迫感が包み、筋肉が痙攣する。とっさに顔を伏せて声を押し殺したが、その無意識な動きは止まらず、ビクビクと身体が跳ね、こらえきれずに肩を小さく震わせながらルクレツィアは痙攣し続けてしまった。はじくよ

うに擦られた乳首は一瞬にして尖り勃ち、穿たれた喉奥は蕩けるような淫熱を孕む。

（ひぁぁ……だ、だめぇぇ、イッ……イッてるぅぅ……）

子宮がギュゥゥ……と締めつけられ、膣道から新たな淫蜜が、ブシュリッと飛沫を撒き散らして股間から噴きだした。はち切れんばかりに膨張した乳首は全身の痙攣に合わせてジャケットに激しく擦られ、さらに勃起させられながら、狂おしいまでの快感を生む。下を向いたままの顔は思いきり舌を突きだし、唾液をボタボタと床に垂れ落としている。その表情は快楽に緩みきった淫蕩な笑みを浮かべており、抗うように歪んでいた瞳は涙で潤み、いつの間にかだらしなく細められていた。

それほど感じきった表情と仕草にもかかわらず、不本意な絶頂のせいで身体は針一本ほどの満足感さえ得られていない。無理にこらえようとしたのが災いしたか、疼きと熱は消えることなく身体の芯に引っかかったまま。心に残ったのは、小水を飲まされてイッてしまったという、プライドを崩壊させるような事実。そして――頭に響くのは、絶頂の最中に聞こえてきた、頭上からの感嘆のため息だった。

「まぁ……」

「うわぁ……」

誰一人として、絶頂を指摘する者はいない。けれどその短い感嘆には、千を越す言葉が込められていた。絶頂の波が過ぎ、脱力した身体からポタポタと恥水の雫がこぼれる。あまりに惨めな姿――ルクレツィアは羞恥のあまり、とうとう涙をこぼしてしまう。

「う……うぐっ、うぅぅ……」
ポロリとこぼれた一滴、それだけの涙だが、ルクレツィアは敗北感で満たされていた。伏せた顔を下から覗き込むように、女が見上げてくる。
「さ、綺麗になりましたよ。……ところで、そろそろ我が軍に投降しようという気持ちには、なられませんか？」
「うぁ、う……」
虚ろな瞳を浮かべながらも、ルクレツィアは捕らわれの部下の顔を思いだす。そして口にした答えは――。
「い、やだ……お前たちには、屈するものか……」
「そうですか……では、失礼します」
それだけを言い残すと、女たちはドロドロに汚れきった捕虜に見せつけるように、洗面器のお湯で指先と陰唇を洗い流す。水気をタオルで拭き取るとスカートを正し、トイレを済ませたあとのような気軽さでそのまま牢から去っていった。
それを見送ったルクレツィアはしばし呆然としたまま、身じろぎ一つしない。いや、低く呻くような声が小さく響き、よく見なければわからない程度に肩が震えていた。
「ふ、ふふふ……」
口からもれるのは呻き声ではなかった。力なく自嘲する笑いが流れだす。
「はは……それを洗うための、お湯だったのか……く、くくく」

結局自分は、またもバロウズの手の上で踊らされただけだ。あまりの浅はかさ、そして愚かさに、もはや乾いた笑いしか吐くことはできない。瞳はなにも映すことなく、歪みも笑みもせず見開かれたまま、ただ一筋――涙を流すばかりだった。

◇

「ぐふふふ……ぐはははっ、わはははははっ！」

モニター室にて、バロウズは大声で笑いを上げていた。響く声はそれだけ、周囲のリヒテル兵たちは、声を発することができなかった。

尿を浴びて絶頂する女の姿を見せられてはこうもなるだろう、しかもアップで映しだされたルクレツィアの股間は、絶頂の瞬間にドプリと溢れた牝蜜の染みを広げており、どんなフォローも不可能な醜態を見せつけていたのだから。

「まさかここでイッてしまいおるとは……ぶはははは！　おい、お前たち、明日の通信を楽しみにしておくといい。これほどの痴態を晒した牝が、どんな顔で会話するのか……ぐはははっ、想像しただけで笑いが止まらんわ」

もはや罵言に言い返すこともできない。モニターに映る女将校は、絶頂を極めた瞬間に一時停止されている。その顔も身体も尿まみれで、口の中にさえ注がれているというのに屈辱に表情を歪めることもなく、快感に緩んだ牝の瞳を浮かべて舌を垂らしていた。

兵たちの心に疑問がよぎる――本当にこの女は、我々を助けに来たのか、と。

◇

「……そうか、そっちはどうだ？　変わりないか？」
妙に落ち着いた口調、そしてクリアな思考を保ったまま、ルクレツィアは濡れた顔のままでモニターに向かっていた。ジャケットは白濁の斑模様に黄色の染みだらけ、タイツまでずぶ濡れである。けれど、前日の強烈すぎる屈辱――それを忘れたわけではない、むしろその反対なのだ。
（ふ、ふふふ……いまさらなにを、恐れるものがある……）
尿で達してしまったことで吹っ切れていた。元より自分の心や身体など、部下たちを助けるため敵国に捧げたようなものだ。それをどこまでも貶められたところで、もはや毛ほどの痛みも感じたりはしない。
（そうだ、彼らを救えるなら、私はどんな汚辱にもまみれてやるさ）
自己犠牲の究極とでもいうのだろうか。それだけの達観した気持ちで、ルクレツィアは数日振りに本心からの慈しみと労りをもって、兵たちと対話をすることができていた。
だが――肝心の兵たちの様子が、今日はいつもと違っていた。
「おい、どうした？　なにか妙に落ち着きがないようだが……」
「いえ……そんなことは……ぅっ、くぅ……」
時折、顔を引きつらせてなにかにこらえるような表情を浮かべてみせる。そうかと思えば心地よさそうな緩んだ顔を見せるなど、目まぐるしく様子が変わっているのだ。別の兵がモニターに映っても同様である。

「まさか、なにか危険な目に遭わされている……のか？」
「いいえ。我々の身の安全は、完全に保障されています。どうぞご心配なく――うっ」
またも苦悶を浮かべたような表情、心なしか身体が震えているようにさえ思えたが、画質の荒い旧式モニターでははっきりとわからなかった。それでも、さすがにおかしいと感じたルクレツィアはさらに詰問する。だが――。
「おい、どうした！」
「本当になんでもありませんのでっ……じ、時間のようです。それではこれで……」
プツッ――と、いつものような敬礼を見せることもなく、一方的に通信を遮断されてしまった。黒くなったモニターには、引き締まった自分の顔しか映っていない。
「まったく、いったいなんだと……ん？」
それを見計らったかのような――あまりのタイミングのよさで、牢の鉄格子が開かれた。いつもの淫宴、白濁陵辱のために男たちが群れをなして訪れたのだ。
（……ふん、あと二日くらい……なんだというのだ！）
耐えてみせる、そんな決意に瞳をキリリと引き締めるルクレツィア。けれど――宴を予感した肉体は勝手に発情し、口内にジワリと唾液を湧かせてしまっていた。

◇

「し、少佐殿……すみません、くぅっ……す、すみませんっ」
通信を終えたリヒテルの兵たちは自戒するようにそう呟きつつも、自らの股間に顔を埋

めている女たちの頭を撫でていた。昨日から手の拘束を解かれているというのに、兵たちの顔には逃亡や抵抗の意思は、毛の先ほども感じられない。
「も、もう少しで……気づかれるところだったではないか……っ」
「んぶぅぅ……ちゅるっ、んふふふ……申し訳ありません。あまりにも貴方のオチンポが美味しいものですから、夢中になってしまいましたの……れおぉぉ、はぁむぅ……」
艶かしく笑んでそう答えると、女は再び肉棒に吸いついて舌を絡めつつ、強く吸い上げる。それ以上強くも言えず、兵たちは視線を巨大モニターに戻した。そこに映る映像は、ルクレツィアが淫猥に蕩けさせた瞳を細め、顔にまとわりついた精液をチロチロと舐め取っているものだった。それを見ると、股間の屹立がさらに猛るのを感じる。
「しょ、少佐……っ、なんて、いやらしい顔を……っ！」
信じがたい光景だが、昨夜の映像のせいだろうか、兵たちには、これがルクレツィアの本性なのではと次第に強く思えてしまう。一度考えてしまうと、獣欲に満たされた精神はその気持ちを否定しようせず、逆に彼女を貶めるような言葉さえ吐きださせた。
「そ、そんなに精液が飲みたいなら……飲ませてやる……ぅ、うぅっ！」
鼻の頭にこびりついた白濁まで必死に舐め取ろうとする浅ましい姿は、もはや敬愛する美人将校ではなく、ただの淫乱な牝にしか思えなかった。視界から受ける快感と、股間に吸いつく女たちから与えられる快感に、男たちは一気に絶頂まで上り詰める。
「うくっ……だめだっ、ぐぅぅっ！」

――ドプゥッ！　ドクドクッ、ドクッ……。

「んあぁっ、んじゅるぅっ……じゅぶ、ちゅぱぁぁ……んぐっ、んっく……うふふ」

精を受けたあとも、女たちは丁寧にしゃぶって肉棒を掃除し、それどころか再度の口愛撫を絡めてくる。

「はぁぁ、んむぅ……ふふ、明日はルクレツィア少佐に射精なさるのでしょう？　わたくしの口で、思いきり予行練習なさってください……んぶぅぅ、れろぉ……んちゅ」

「なに……？　ぅ……くぅっ、そう、か……明日は……」

バロウズから今朝言い渡された言葉が、頭にリフレインする。

『どうだ、お前たちも我が軍に加われば、あの女の口をいつでも味わわせてやるぞ？　いや、口だけではない。好きな穴を、いつでも使えるのだ……悪い話ではなかろうに。……期限は明日の朝、それまでじっくり考えるがいい……ぐふふふ』

映像の中、ルクレツィアは相変わらず娼婦のような笑みをたたえ、精液をピチャピチャと舐めしゃぶっていた。兵たちはいつしか映像に夢中になり、リアルに感じられるフェラ奉仕の快感から、淫らな妄想に取り込まれてしまう。

（あの口を、胸を、身体を、好きなように……弄れる……）

そんなバロウズの提示した魅力的な提案は悪魔の爪のように心に侵入し、すでに形となって、兵たちの心を掌握してしまっていた――。

◇

（やっと……七日目、一週間だ――）

今日が終われば皆は解放される――それを思うだけで、達成感が心に満ち溢れる。

ドロドロに汚されながらも心折られることはなく、誓いを守り、部下の命も救うことができた。軍人としての誇りを覚え満足していると、廊下の奥から気配を感じる。いつもの兵たちだろうが、それさえももはや憂鬱には感じない、来るなら来いというものだ。

――だが、現れたのは、いつもの二人組などではなかった。

「なっ⁉　お、お前たち……なぜ、こんなところに……っっ！」

姿を見せたのはバロウズと、その背後に従うリヒテルの兵たちだった。予想だにしなかった事態、顔が引きつったまま硬直する。とっさに身体を捻って身体を隠そうとするのだが、全身白濁まみれ、しかも尿に濡れた形跡まで残るのは隠すことができなかった。

けれど、そんな姿に驚きを見せるでもなく、兵たちは黙ったまま、小型モニターをルクレツィアに向けて突きだした。そこに映っていたものは――。

「っっっ！　そ、そんな……これは……馬鹿な、どうして……っ！」

『んじゅるぅぅ……ちゅぱっっ、むっちゅぅ……じゅるるるぅ……ふわぁぁ……お、おいひいぃん……れろぉぉ……』

モニターの中からは、ルクレツィアが卑猥な水音を立てて肉棒をしゃぶる音が響いていた。見た瞬間、それがなんなのかすぐにわかった。毎朝の食事風景、それが録画されたものだ。だがどうしてそんなものが……疑問はすぐに答えに変わる。目の前でニヤついてい

る禿頭の巨漢、そいつ以外に元凶がいるはずもない。
「バ……バロウズゥゥッッ！　貴様、よくも騙したな……この下種が、よくもっ！」
羞恥に色づいていた顔はそのまま激昂の朱で満たされ、身を吊るし上げるワイヤーを引き千切らんばかりに身を乗りだし叫ぶ。が、戦姫の憤怒に満ちた表情などまるで気にも留めず、落ち着き払った口調でバロウズが答える。
「なにも騙してなどおらん。お前が部下たちのために奮闘する姿を見せてやれば、いっそう忠誠心が高まるだろうと思ってのことだ。もっとも……効果は逆だったがなぁ」
その言葉にバロウズの背後を窺うと、まるでバロウズに呼応するかのように、兵たちは同じような下卑た笑みを浮かべてこちらを見ていた。
「お、お前たち……なぜだ……っ！」
「偉そうだな、変態女」
ルクレツィアの悲痛な声に冷たく答えると、互いに顔を見合わせて低く笑う。
「まったくだ、小便なんて飲んでイッちまうとはよ……これじゃ、娼婦のほうがまだお上品だぜ、なあ？」
「なっっ⁉　そ、それは……違うんだ、あれは……」
人間としての尊厳を粉々に、完膚なきまでに粉砕されたあの姿さえ目撃されていた――顔から火が出るほどの羞恥に、ルクレツィアは泣き叫びそうになる。
「違うっっ！　違うんだっ、あれは……私は、お前たちを救おうと……っ、だからっ……」

「……だから、小便飲んでイキました、ってか？　そんなんで俺らが助かるかよ」
冷めた眼差しと言葉をかけられ、ビクッと身が竦む。――彼らの言うとおりだ、絶頂と彼らの命にはなんの関係もない。
「うぅ……しかし、違う……違うんだ、信じてくれ……っ」
身体の感度を弄られたのだから仕方ない、そんな言葉が脳裏を掠めたが、それは違う。自分は、精液の匂いや味で、すでに絶頂寸前まで官能を高められていたのだ。尿は最後の一押しに過ぎない。つまり、自分が最低の行為で感じてしまったばっかりに、黄金水を浴びて絶頂を迎えるなどという、人間――いや、畜生以下の恥を晒してしまったのだ。
「あんたみたいな変態に、なにを期待してたんだかな……」
モニターが切られても、ルクレツィアは放心したままだった。兵たちの顔を見ることができずに目を伏せていると、そんな自分を蔑む視線を感じる。顔も上げられず打ちひしがれるその頭上から、吐き捨てるように言葉がかけられた。
「俺たちはこっちにつく。あんたを支配する立場に回らせてもらうぜ」
それを聞いたルクレツィアは、無意識に顔を上げてしまう。支配される、そう思っただけで勝手に瞳が潤んでしまい、唇が開かれてしまうのを止めることができなかった。弛緩した牝の顔を目にし、男たちはゴクリと唾を飲む。
「おぉ……さすが淫乱少佐だな。元部下相手でも、いきなり興奮しちまうのかよ」
その言葉は、それまでの冷たい口調でも女少佐を蔑むような口調でもなく、どこかに熱

を孕んだセリフだった。だがその熱は心を温かくするような優しさなど欠片もない、己の欲情を滚らせ、ぶつけようとする意思のみしか感じられなかった。脳裏に突き刺さるその言葉に電流が奔り、全身が硬直する。

「そ、んな……私は、私はぁ……ぅ、くぅぅ……」

追いすがるような表情を浮かべていた顔がクシャリと歪み、生気を失ったように顔から色がなくなってゆく。彼らのため、そればかりを思って耐え忍んだ一週間はなんだったのか――すべて、茶番に過ぎなかったのか。考えてしまうと、全身から力が抜けた。

（私が、私がしていたことは……無駄だった、というのか……）

また一つ、ビシリと心に亀裂が走る。希望という名の心の破片がポロポロとこぼれ落ち、あとには傷だらけの、絶望という心しか残っていなかった――。

呆然として霞む視界に、ヌゥッと赤黒い棒が突きだされた。瞬間我に返ると、目の前にあるのは男たちの肉棒だった。どれもが血管を浮き立たせた凶悪な形状をしており、なにより、牡の臭気が濃厚に立ち込め、鼻腔をくすぐってくる。

（ふぅ……ぅん、だ、だめぇ……こんなの、すぐに……）

必死に衝動に抗おうと顔を背けるのだが、肉棒の先端が唇に触れた途端、凄まじい快感が脳天に突き抜けた。閉じきっていたはずの唇から唾液が滝のようにダラダラとこぼれ、顎から下へ流れてゆく。震える唇が自然と開かれ、ためらいや恥じらいなど忘れてしまっ

たかのように、舌を目いっぱいに差し伸ばしてしまう。
（やめろっ、止まれぇ……そんな、それをしては、もう……）
――ピトォォ……レロン……。
「あ、あぁぁ……んっ、ふぅぅ……」
制止の声も心には届かず、舌は簡単に肉棒へ達し、犬が主人の手を舐めるように、ペロペロと激しく動かされてしまう。それを見ていきり立つのは、奉仕を受けた兵たちだ。
「くそ……っ、チンポ見た瞬間これか！　この変態が！」
頭上からの罵声にビクリと震えるが、肉棒に這わせる舌の動き、吸いつく唇の吸引を止めることはできなかった。上目遣いに男たちを見上げ、弱々しく言い訳をささやく。
「ひ、ひがふのぉ……んみゅ、ちゅるぅ……ぅん、はぁ、ぶぅ……こえ、はぁ……」
だが、肉棒を咥え込んだままでなにを言おうとも、もはや説得力はない。むしろ罵られることでますます興奮するかのように、より積極的にしゃぶりだしてしまっていた。そんな態度に男たちは激昂し、次々とルクレツィアの美貌に肉棒を押しつけて怒鳴る。
「おらっ、あんたの好物だよ！　美味そうにしゃぶれ、チンポ好きが！」
「んんぅっ⁉　ら、らめぇ……んじゅっ、じゅぶぶぅ……そ、そんな……んぐっ、そんないっぱい、できない……んふぅ……」
もはや口先だけとなってしまった抵抗を見せながら、ルクレツィアは押しつけられる熱塊に頬擦りし、先走りを自分の顔になすりつけて瞳を細める。

（ふわっ……はぁぁん、だ、だめぇ……本当に、止まんなく、なるぅ……）

弱みを知り尽くされたノルドス兵たちではなく、唯一自分が気高く振る舞える相手だったリヒテルの兵たち……そんな彼らにまで自分の牝の性を暴かれてしまい、心のタガは失われつつあった。もうどこまでも堕ちてしまえ……そんな誘惑の声がルクレツィアをより淫らに、男好きの娼婦へと作り変えようとする。けれど心に引っかかった最後の理性は、堕ちようとする精神にギリギリのところで歯止めをかけていた。

（だめだっ！　だめだ……しっかり、しろぉ……彼らはまだ、洗脳されたわけではない。説得しろ……救うんだ、ルクレツィア……っ……ぃひぃんっっ⁉）

だが、その理性をも堕落の淵に蹴り落とそうというのか。突如襲いかかった爆発的な快感に、ルクレツィアはくぐもった呻き声を甲高い嬌声に変えて、大きく張り上げてしまう。

「ふぐっ……ひきゃぁぁんんっっ！　ひぁっ、はぁぁん……んちゅばぁっ、んぶっ、んんぅ……な、なにぃぃ……ひぃぃんっ！　む、むねぇ……」

いつの間に背後に回られたのか、肉棒に夢中になっていたばかりに気がつかなかった。後ろから二本の腕が伸び、汚れも気にしないでジャケットの上から胸を鷲掴みにしていた。たっぷりと肉の詰まった柔らかな豊乳をムニュムニュと握り潰し、下から掬い上げてタプンタプンと揺さぶり、その感触を堪能し尽くそうと揉みしだいてくる。

「これが少佐殿の乳肉でありますかぁ……くくっ、乳首までビンビンですな！」

「ひきゃっ、や、だめぇ……先っぽ、はぁ……ふぐっ、んんはぁっっ！」

ジャケットを突き上げるニプルを指先で挟み込み、それを引っ張って乳肉を引き伸ばす陵辱者の動きに、悩ましく悲鳴を上げるルクレツィア。痛みと快感が混在して全身に染み広がり、どうしようもないほどに肉悦を覚えてしまう。すでに限界を迎えているのは、無意識にカックンカックンと振られる腰の動きからも明らかだった。

「いやらしく尻くねらせやがって……このっ」

（違う、違うんだぁ……これは、身体を敏感にされたせいで、仕方なく、感じているだけなんだ……んくっ、んふぅぅんっっ！）

心の叫びは言葉に変わらず、ただ喘ぎとなって口から迸るばかりだった。胸を捏ね回していた男は、一方の手を股間に差し入れ、タイツの上から陰唇をまさぐってくる。完全に割れ綻んでしまった淫粘膜は、薄布越しでもわかるほどに蜜を吐きだしており、触れただけの男の指を、一瞬にして汚してしまう。それを膣に塗りたくるように指を押しつけられると、ニチュゥ、ニチャ……グチュゥ……といやらしい粘水音が響き渡り、ルクレツィアは恥じらいで顔を真っ赤に染めた。

「ひやぁぁ……んぅっ、よ、よせっ……だめだっ！　そこは、だめっ……ひくぅっ！」

制止を訴える言葉、けれど腰は自然とくねり自ら指を擦りつけ、水音をより大きく響かせる。そのとき、男はなにかを思い当たったように股間と胸から手の平を遠ざけた。

「おい、アレ……試してみていいか？」

「ん？　おおっ、そうだな。やってみろよ」

なにをされるのかもわからぬまま、脚の電子錠を外され、ガクガクと痙攣する長い脚で無理やりに立ち上がらされる。吊るされた腕に体重をかけ、ムッチリとした尻を思いきり背後に突きだす淫猥なポーズを取らされ、そのまま肉棒をしゃぶらされ続ける。

（な、なんだ……なにを、するぅ……んっ）

ピシャッ、と乾いた音を立てて尻房が叩かれた。丸肉を叩かれただけでも痛みはすぐさま快感に変わり、内粘膜から子宮へキュン……と響いてしまう。背筋をゾクゾクと這い上がる悪寒のような快楽波が、脊椎を震わせ、脳を揺さぶる。

「んぁっ、あむぅぅ……んちゅるっ、ちゅぱっ、じゅるるぉぉ……んぐっ、ん……っ⁉んほぉっ、ふむおぉぉぉっ！」

だが、心地よい快感に目を蕩かせていられたのはその僅かなときだけだった。次に触れた感触で自分がなにをされたのか理解できる、タイツが裂かれ、尻房を大きく割り広げられたのだ。ショーツをずらされ、窄まった肉皺が露出すると、ビクビクと震える熱い肉塊を押し当てられた。先走りを塗りたくるように尻谷間を上下へなぞられると、身体は勝手に尻を突きださせ、その肥大な尻肉をさらに強調するように見せつけてしまう。

（や、やめろぉ、そこは……そこは、挿れては……んっ、んんぅぅ……）

菊口を肉棒から遠ざけようと、腰に力を入れて前に引こうとするが、そこを力強い手がガッシリと掴み、逃げることを許さない。避けられぬ痴態を想像し、美貌が怯えたように引きつる。けれどピタリと押しつけられた肉棒が、菊門にキスをする熱い感触——それだ

けで全身の筋肉は弛緩し、尿道口がトロトロに緩んでしまった。
「おらっ、もらしやがれっ！　チンポ狂いの、変態精液少佐！」
「だめぇぇぇっっ、おぶっ、んぶぅぅっ、ふぎぃぃぃんっっ！」
抵抗のために開いた口に容赦なく肉棒が捻じ込まれ、それと同時に深々と、菊壺に男根がめり込んでゆく感触を味わわされる。その瞬間、緩みきった尿道口を激しい迸りが流れてゆくのを感じ……。
「ひあぁっ、あはっ……はぁぁうぅぅんっっ！」
――ブシュッ、シュバァァ――ッッ！
だらしなく開いた小孔から、熱い黄金の濁流が噴きだして飛沫を上げた。上官としての威厳を完膚なきまでに粉々にする痴態に、ルクレツィアは頭の中を真っ白に染める。
（ふぁぁ……ダメ、見られて……ひぃぃん……）
ブシュゥッ、ブシュシュシュッ！　と途切れることなく撒き散らされる小水に兵たちは興奮し、さらに強く肉棒を押しつける。女兵士の尿で濡れた髪を己の肉棒に巻きつける者、頬に突き立てる者、乳房を先端で捏ね回す者……全身が牡の欲望の捌け口にされているという実感が、あちこちから押し寄せてルクレツィアを淫らな牝へと追い込んでゆく。犯される肛門から流し込まれる快感、口で奉仕する二本の肉棒、そして髪を、顔を、乳房を、同時に汚される屈辱と背徳の快感が、全身の感度を爆発的に高めてしまう。
「んほっ、ほぁぁぁっっ！　ひぁうっ、あんっ、んっはぁぁんっっ！」

一週間の間、無意識の中で待ち焦がれていた熱く固い肉棒が、いまや身体中に触れている。久々の感触は麻薬以上の悦びを与え、敏感にされた身体を、弱りきった心をたやすく蕩けさせて快楽漬けにしてゆく。

「ひぐっ、んむっ、ぐ……んぐっ、じゅるじゅる……ちゅっぱぁ……おほっ、おぉ……」

あちこちに肉棒がある、その事実だけが心を埋め尽くしている。なにも考えられないまま快感のみに支配され、瞬く間に意識は遥か高みに打ち上げられてしまった。

（ひきゃっ、はっ、はあぁぁ……く、くるのぉっ、きちゃうぅ……）

絶頂の淵に引っかかった意識が真っ白な閃光に包まれる。自ら振ってしまっていた尻が深々と肉棒を咥え込み、腸粘膜でチュパチュパとしゃぶり尽くしてしまう。粘膜の一筋一筋が、滾りを訴える熱い感触に次々と焦がされるのを感じる。菊壺の内側もミッチリと肉茎を咥えて締めつけている肉皺も、尻全体が淫獄の炎に燃やされ火照りきっていた。

「んふっ、んぅぅっ、ひぁっ……ひぃぃんんん――っっ！」

こらえようもなくビクビクと身体が跳ね、思いきり背が仰け反ってしまう。失禁しながらも股間からは淫蜜を吐きこぼし、腰がくねくねと揺さぶられた。その姿を目にし、肉棒を擦りつける兵たちはさらなる興奮を煽られ、ルクレツィアの肉体に溺れてゆく。

「イ、イッてるぜ……あの戦姫ルクレツィア＝ベルが、俺たちのチンポでよ……っ」

「ひんっ、ひぃぃ……くはぁっ、あんっあぁぁっっ！」

牝恥を指摘される恥辱にも快感を覚え、喘ぎをもらして身悶えてしまう。途切れぬ絶頂

が、飛翔したルクレツィアの意識を戻そうとはしない。狂ったようによがり、肉棒をしゃぶり、アヘ顔を晒す美人将校に触発され、兵たちも次々と絶頂を迎えてゆく。
「おらっ、大好物のザーメンだよ、しっかり浴びろ、変態！」
――ビクビクビクゥッ！　ドクッ、ドビュルッ！
髪に包まれた肉棒が躍動し、頭皮に直接精液を噴きかける。続けて頬で、乳房で肉棒がはじけ、熱い白濁が身体中に新たな汚れを染み込ませてゆく。その感触と匂い、それだけでルクレツィアはまたも軽い絶頂を迎えさせられてしまう。
「ひぁんっ、ふっく……ふわぁぁ……」
ビクビクと身体は痙攣し、芯に響くような絶頂の感覚に酔いしれてしまう。微笑んだ頬は快感に緩み、撫でられた猫のように瞳が細められる。思わず口内の肉棒を喉奥まで飲み込み、舌先をゆっくりと這い上がらせてしゃぶってしまった。同時に尻に突き刺さった肉棒をもギュゥ……と千切らんばかりに締めつけ、貪欲に精液を吸い上げようとする。
――ドプゥッ！　ドピュルッ、ビュルッビュクゥッ！
たちまち口内に濃厚な牡液の味が広がり、生臭い香りが脳内に流れ込んできた。腸奥まで引き込んだ亀頭の先端がプクリと膨れ上がり、粘り気の強い白濁したマグマがビタビタと腸壁を叩いて注がれる。口でも菊穴でも、粘膜が白濁液をクチャクチャと咀嚼し、唾液と腸液を絡めて奥へ奥へと飲み込んでゆくのがわかった。
（ひやぁ……んふっ、ひゅぅぅん……わ、私ぃ……イッてるぅ、ものすごく……イッてる

のぉぉ……んはっ、あぁぁん……）

腸奥ではじけるように肉棒が脈動するたび、喉を鳴らしてコクコクと精液を飲み下すたび、ルクレツィアは頭を激しく振りたくり、背中と腰を跳ね踊らせての激しい絶頂を何度も何度も経験してしまう。絶頂に次ぐ絶頂が弱りきった心を補強するように包み込み、もはや胸中の声すらも凛々しさが欠片ほどにもない、弱々しい牝の声に成り下がっていた。

（ひぁぁ……ひぐっ、ひってるふぅ……きもひ、気持ちいひぃ……）

口の中に残る萎えた肉棒を、赤子がおしゃぶりを吸うようにチュウチュウと吸い上げるルクレツィア。最後の一滴までを啜り上げた美人将校はだらしなく緩んだ表情のまま、意識を遠のかせ、やがて身体を脱力させてガクリと崩れ落ちそうになった。――が、その頭を掴まれ、強引に引っ張り上げられてしまう。

「おいおい、寝てる場合かよ。本番はまだこれからなんだからなぁ？」

ニヤつくリヒテル兵の言葉にさらなる陵辱の未来を予想しながらも、すでに心身とも限界を迎えていたルクレツィアの意識は、そのまま闇へと飲まれていった――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/